

〔資料〕

示水遺影本『日蔵夢記』

——解題と影印・翻刻——

阿部 美香

【解題】

はじめに

『日蔵夢記』は、北野天神縁起の形成にとって中核をなす、重要なテキストである。その伝本は、嘉永四年（一八五二）に天台の学僧であった真阿宗淵上人（一七八六～一八五九）によって写され、『北野文叢』に「道賢上人冥途記」と題して収められた旧内山永久寺本が唯一のものとして知られ、『北野誌』や『神道大系』に活字化されて研究に供されてきた。

このたび、幸いにも四天王寺大学図書館恩頼堂文庫に所蔵される『示水遺影 日蔵傳』（以下に、示水遺影本と適宜略称する）と、北野天満宮に所蔵される『北野文叢』巻第十一所収「道賢上人冥途記」（以下に、北野文叢本と略称する）を見つかる機会を得て、両本を比較検討した結果、示水遺影本は北野文叢本の親本にあたり、しかも宗淵が自ら永久寺本を透き写した透写本であって、喪われた内山永久寺本のすがたそのものを伝える善本であることが明らかになった。そこで、以下に調査に基づく両本の情報とその関係を述べたうえで、示水遺影本の影印を掲げて翻刻紹介を行う。

一、示水遺影本『日蔵夢記』

「示水遺影」とは、宗淵上人の熱心な讃仰者であった猪熊信男氏が、自身で蒐集した宗淵上人の書写本や印施本、消息、画稿、弟子泰温の所持した宗淵書写本などを同一装訂の卷子本に成巻し、これに宗淵をあらわす「示水」を冠して付けた呼び名である。猪熊氏の手によりいわば叢書化された一連の本のなかであって、『日蔵夢記』は「示水遺影 日蔵傳」（無題

籤、打ち付け書き）と題され、四天王寺大学図書館恩頼堂文庫（整理番号一一一一、図一）に収められている。

その書誌を示せば、法量縦三三・七糎、横二六・五糎七厘の透き写し用の紙二二紙から構成されている。本紙の総長は、現状の成巻された状態で五八六・九糎、これに猪熊氏が施した新補表紙と軸紙一紙並びに軸を加えて一巻を成す。本文の書体や文字の筆勢のみならず、墨の残り具合や虫損、本紙の破損状態に至るまで忠実に写し取られており、書写当時の原本の保存状態を具体的に知ることができる。表紙は既に失われた状態であったのだろう。冒頭の本紙一紙目は大きく破損し、内題の上部が欠失するが、残存する墨跡からは「夢記」の二字を判読することができる（図二）。上部の欠失部分にはおよそ二分の空きがあり、そこに本来「日蔵」の二字があったと考えることなく不自然ではない。界線は無く、一紙十三行～十四行（二紙目のみ十二行、最大十五行）、字高は二六・〇糎五厘である。本文の天地が揃っていることからすれば、原本に何らかの界線（例えば天地に押界）があった可能性を考えることができる。

本紙左上端には、紙数をあらわす漢数字が「一」～「廿一」まで、小字で墨書されている。但し、二紙目と七紙目には無い。二紙目の天辺にはその痕跡と思しき墨跡がごく僅かに残っており、成巻にあたって天地を切り揃えた際に落ちてしまったのだろう。ところが、これに代わって「二」の数字を持つのが四紙目である。その「二」は、摺り消されて「四」に訂されている。それはこの四紙目が、宗淵の書写した当時、二紙目の位置にあったことを示すものだろう。実際に、一紙目と三紙目、そして四紙目には大きな破損の跡が見えるのに対し、二紙目にはそれが無い。同様に七紙目

図1 『示水遺影 日藏傳』表紙



図2 内題

破損部分に二字分の余裕があることから、本来は「日藏夢記」と記されていたか。

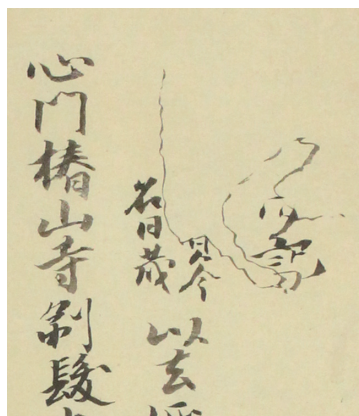
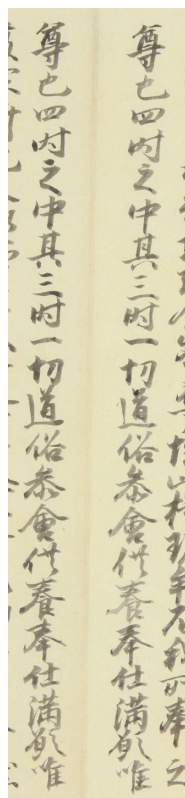


図3 二重に写された部分

二行の文字の大きさや形の酷似から、透き写しであることが判る。



も本来の順序とは異なる位置にあったらしく、これを飛ばして、「七」の数字が八紙目に付されている。こちら後から正しい順序に気付いて、七紙目には「(七)ノ上」、八紙目の「七」の下には「ノ下」とそれぞれ朱書きして、「七ノ上」「七ノ下」という具合に、前後の順を示す。原本には、一部に錯簡ないし糊離れが生じていたのである。

あらためて本文を見れば、返り点などを付さない白文である。訓点も和歌の部分を除いて基本的には付されず、一部に区切り点らしきものを遺すがごく僅かで、全体に付いていた跡は無い。見せ消ちや欄外注記は三箇所

図4 等間隔に連続する虫喰い部分

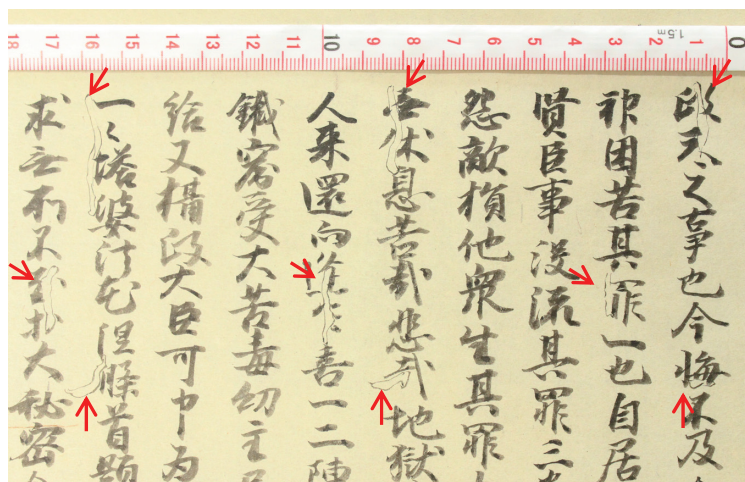
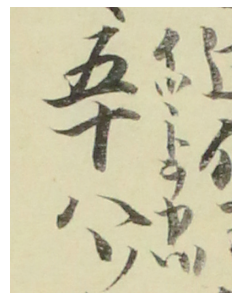


図5 片仮名訓「ツ」



に認められる（その注記が原本のままか、宗淵によるものかは判断できない）。このほか「鐵丸」を「鐵九」、「紀景連」を「化景連」などと写しているのは、原本の誤りというよりも、写真とは異なる透き写し作業の限界を示すものであろう。紙を改めた際に、直前の一行を再度書写してしまった箇所も見える（第二十紙の最終行と第二一紙の二行目。図3）。その誤りは丁の変わる冊子本を写していたのであれば到底起こり得ない現象で、むしろ原本が卷子本であったことを示すものとして注目される。十三紙目から十四紙目にかけて等間隔に空いた虫損も、巻かれた状態で虫に喰われたことを示す痕跡であり、卷子本ならではの現象である（図4 赤矢印部分）。

上記のことから、かつて内山永久寺に伝えられていた『日藏夢記』は、

卷子本であったとみて誤らないだろう。その法量は、本文（字高約二六糎）の天地に各三糎ほどの余白を想定すれば、およそ縦三三糎程度的大型本であったと推測される。奥書が無いため原本の書写年代は不明であるが、宗淵が忠実に書写したその文字のかたち（例えば和歌に付された片仮名の「ツ」など。図5）からは、鎌倉時代に顕著な傾向をうかがうことができる。冒頭を破損し錯簡が生じた状態になっていたとはいえ、鎌倉期に遡る古写本が本紙を一紙も失うことなく伝存していたのである。これを感じた宗淵は、巻末に次のような識語を記した。

右一卷、大和國內山永久寺所藏。于爰、嘉永四年秋八月、不圖感得寫之。雖末法、以威神力呵護而存者乎。実、尊神御垂跡之因縁、可畏可仰。幸受此土之生、共預大政天化益、可生其淨土連列眷屬之一人者也。

冒頭の「夢記」から最終行に至るまで、本文は全部で二八九行、これに三分の余白を設けて、右の宗淵識語（五行）を付した透写本が成ったのは、聖廟九百五十年御忌を迎える前年の出来事であった。

二、北野文叢本『日蔵夢記』

宗淵が北野天満宮に奉納した『北野文叢』百巻は、開版も企図されていたことが知られている^⑦。その一大事業の証として猪熊氏の手元にあったという「柱の場所」に『北野文叢』と銘を打ち込んだ印刷物一葉^⑧は、これも現在は四天王寺大学図書館恩頼堂文庫所蔵『示水遺影 文画集』（整理番号一一〇八）の中に見出すことができる。柱に「文叢八 十四」とあり、『北野文叢』巻八の十四丁目であったことが知られる（図6）。またこの一紙から、開板された『北野文叢』は、半丁が十行であり、四周に引かれる匡郭の縦寸は二二糎ほどであったことも分かる。

これを踏まえ『北野文叢』巻第十一を見ると、天暦元年三月、永観二年六月、正暦三年十二月、同四年八月、同四年十二月の御託宣の記と、道賢上人冥途記、最鎮記文を収めて全三五丁からなるこの一冊も、同じく半丁十行からなり、天地に墨界を引く。「道賢上人冥途記」のみ、初丁と末丁にだけ墨界を引いて中を省略しているが、一書のうちで統一されたその規

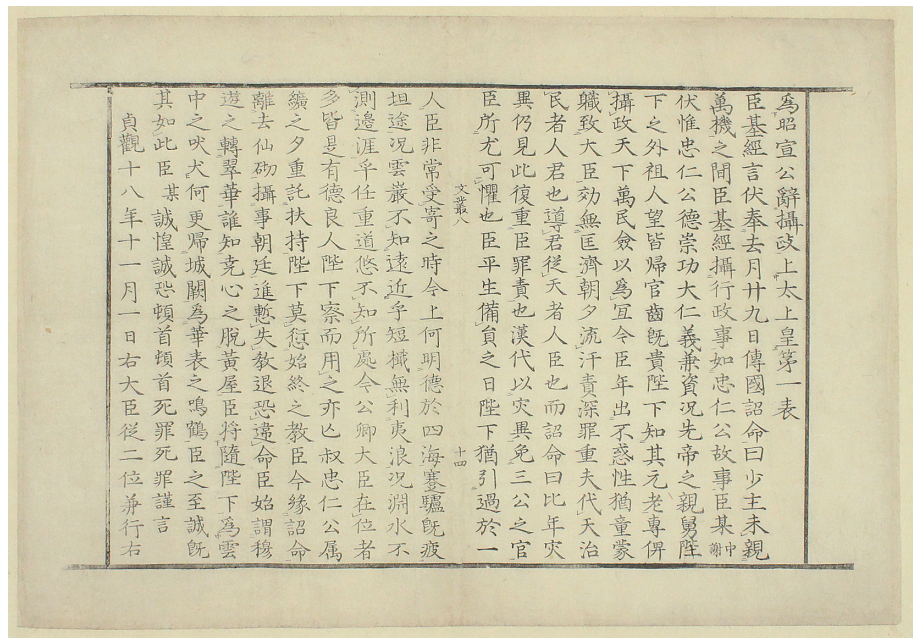


図6 開版された『北野文叢』柱に「文叢八 十四」と見える。

格は、本書が開板を見据えて編まれたものであり、またそれを準備する稿本でもあったことを示唆しているよう。ちなみに「道賢上人冥途記」の墨界は、界高二・四・二三・六糎である。

その書誌を示す。『北野文叢』巻第十一は、法量縦二五・四糎、横一七・四糎の冊子本（袋綴）で、藍色の表紙を本紙の前後に付けて仮綴じする。表紙中央には、宗淵の自筆で「北野文叢 十一」と墨書（無題簽、打ち付け書き）され、内題、尾題にはともに「北野文叢巻第十一」とある。裏表

紙見返には、右下に小さく「一校了」の墨書がある。

このなかにあつて『日藏夢記』は、十八丁表から三三丁裏にかけての十五丁分に、「道賢上人冥途記」と題し収められている。その本文は、宗淵が透き写した示水遺影本を親本として新たに作成された校訂本である。校訂者は、宗淵識語の後ろに続けて「権上座實誠欽記」と、その名をしたためた実誠である。従来は書写者と考えられてきた実誠だが、①「夢記」に始まり宗淵識語までの全文を書写した筆跡と、「権上座實誠欽記」の書き入れが別筆であること、②その筆跡は、冒頭の欠失部分の本文を『扶桑略記』に基づいて補った朱筆の文字と同じであり、親本との校合に基づく校訂作業や、親本には無い返点や連読点、送り仮名など、朱墨で書き入れられた文字の筆跡とも同一であることから、書写者ではなく校訂者であることが分かる。また「道賢上人冥途記」の表題とその下にある注記の筆跡も実誠である。その部分を以下に掲げてみよう。

道賢上人冥途記

此題号^レ扶桑略記中引文^ニ所^レ云者也。今此原本^ノ題^ハ虫損^ク、蓋^シ日藏夢記^{ナリ}云^ハ歟。尚^ニ祥^ニスヘシ。

「道賢上人冥途記」の題の下には、擦り消されてはいるものの、よく見るとやはり実誠の筆で、小さく「日藏上人夢記」と書かれた墨跡が残る。これにより、実誠は初め「日藏上人夢記」と仮題を付し、その上で『扶桑略記』に拠つて「道賢上人冥途記」と認定した経緯が明らかにになる。実誠の生没年や事蹟は未詳であるが、彼は宗淵の監修のもとで『北野文叢』に収めるべくその校訂本文を作成した担当者であった。

一方、書写者については名前すら分からない。宗淵や実誠のもとにいた筆生であろうか。筆の勢いに変化があることから、ひとりの人物が時間を置いて書写を続けたものと思しい。模写ではなく、親本を参照して書写を行っている。ゆえに本文の書体や筆勢は、親本と全く異なる。第一紙と、三、四紙目にある大きな破損部分については親本の伝える原本の状態を字配りも含めて丁寧^ニに伝えているが、その他の字配りは異なっている。誤写や脱字も所々に見える。目移りによって生じた誤写には、その上に正しい文字や文章を書いた紙を切り貼りしている。実誠はその一々を親本と突き

合わせて点検し、読み誤りを訂し、脱字脱文の箇所を補入し、原本の破損によって失われた部分の本文については『扶桑略記』も参照して、校訂を行っていた。それでもなお見落とされ、そのままになってしまった誤写や脱字もある。例えば、地獄に墮ちた延喜の帝の詞に「冥途無罪為主」と語られる一文は、北野文叢本では「冥途無罪為王」と誤って写され、宗淵の書写識語の「幸受此土之生」という一文からは、「此」の一字が抜けているという具合である。

それらの書写・校訂作業を通して、北野文叢本の親本が間違いなく示水遺影本であったことを伝える箇所がある。それが、「道賢上人冥途記」の題のある丁を初丁として数えたときの、五丁目と六丁目である。本書は、五丁目から筆の勢いが変わるのであるが、特に五丁目は、本文が五行分の余白を残した状態で次の丁へと移るといふ具合に、一見して中途半端な印象を受ける一紙である。そこに記された「雷火氣毒王我第三使者名也」から始まる十五行分の本文を示水遺影本に照らして見ると、それはちょうど七紙目の本文一紙分であることが分かった。七紙目といえば、紙数の記載が無く、宗淵の書写時に原本の何紙目にあつたのがよく分からない一枚である。しかも、これを飛ばして八紙目に「七」の数字が付されていたことは、前述した通りである。おそらくその順序に従った結果、北野文叢本は一旦、七紙目を丸ごと飛ばし、六紙目の本文に八紙目を続けて書写してしまう。その状態のまま返点や送り仮名、連読点が施されていることから、実誠も誤りに気付かないまま、書写・校訂作業がある程度まで進められたのだろう。この錯誤に気が付いたとき、本文をあらためて書写し直すことはせず、六紙目の本文が終わる直前のところに、七紙目の本文のみを記した一丁分をそのまま挿入したのである。それが、一見中途半端に見える五丁目であった。あらたに六丁目となった本文の一行目に残る六紙目末尾の一文「為大怨賊誰人尊重而彼火」は朱線で抹消され、続く「漸至一高楼下」から始まる八紙目冒頭の本文は、補入記号をもって行頭に来るよう指示された。一方で、抹消した六紙目末尾の一文「為大怨賊誰人尊重而彼火」を、五丁目冒頭の一行「雷火氣毒王我第三使者名也」(七紙目冒頭)の前に補入し、朱線で結ぶことで、本文の流れが訂された。また、五丁目の

本文末尾にある「仏子経寶林中」(七紙目末尾)の文字には、続けて「漸至一」(八紙目冒頭)の三字を書き加え、あえて衍字のごとく見せかけて上から朱線を引くことで、次の丁へと続く本文であることを示した。このような処置を経て、示水遺影本にいう六、七、八紙目の本文が北野文叢本のうえに整えられたのである。示水遺影本の七紙目と八紙目の左上端に、それぞれ朱筆で「(七)ノ上」「(七)ノ下」と付されていたのは、こうした混乱が再び生じないための配慮であったにちがいない。

このように見ると、示水遺影本と北野文叢本の親子関係がより緊密に見えてくる。『北野文叢』は、天神の威徳を讃え、北野天満宮に奉じられた神宝である。そのうちに収められた『日蔵夢記』が、清書された本文ではなく、一連の校訂作業をそのままに伝えるかたちであることには、宗淵の学問、特に古本の探査と書写を介した保存と継承において、校訂本文の作成という営みがいかに重んじられていたかが示されているよう。

宗淵による『北野文叢』百巻の奉納は、箱書に記された自筆の「嘉永元年五月全百冊目録一冊添 竹圓坊権僧都宗淵」から、嘉永元年(一八四八)のことと考えられている^⑫。これに対し、宗淵が内山永久寺で『日蔵夢記』を書写したのは、嘉永四年であった。とすれば、『日蔵夢記』は、後から追加奉納された一書ということになる。『北野文叢』は仮綴じであるから、必要に応じ増補などの対応は可能であった。奇しくも聖廟九百五十年御忌を翌年に控えて、『日蔵夢記』を『北野文叢』に収めるべき重要な一書と認めた宗淵は、実誠らに急ぎ校訂本文を作らせたに違いない。北野の社僧光乗坊能桂の子として、また菅公の子孫として生まれ、天神を仰ぐ宗淵は、日頃より古典籍の書写、校訂作業を天神の威徳である学問そのものとして重んじ、自余に勧めていたという^⑬。その実践の営みを如実に伝える『道賢上人冥途記』の追加奉納は、天神への報恩謝徳に奉ずるにふさわしい。未来に開板される時にはそのための稿本となるべきテキストとして、聖廟九百五十年御忌を期し、法楽の一環として追加奉納されたのではないか^⑭。

おわりに

示水遺影本は、北野文叢本の価値とともに、全百巻におよぶ膨大な『北

野文叢』編纂事業の過程をあらためて照らしだす。と同時に、かつては実誠が、のちに『北野誌』『神道大系』が行った校訂本文作成を再検証し、より正確な本文を求めることを可能にする。例えば、日蔵の兄の墮地獄を語る一文として屢々注目されてきた「汝兄懺破戒不随我教、當墮地獄」の「兄」の字は、『北野誌』とこれを継承した『神道大系』による翻刻の誤りで、正しくは「无」、すなわち「汝无懺破戒不随我教、當墮地獄」と読むべき一文である^⑮。

それだけではない。かつて布留石上明神の神宮寺であった内山永久寺(現在は廃寺)は、一代峯の一角をなす有力な大和国の真言寺院であった。そこに伝来した『日蔵夢記』の鎌倉古写本としての姿を復元可能な示水遺影本は、その絵巻化ともいふべきメトロポリタン美術館所蔵北野天神縁起絵巻をはじめとする天神縁起の成立と展開の背景を考える貴重な資料となる^⑯。さらには鎌倉時代の『諸山縁起』や『鷲峯山冥告記』に見える日蔵の巡歴譚の形成など、南都とつながる修験世界にまで多様な影響を及ぼし、遡って『扶桑略記』が拠とした^⑰『日蔵夢記』の重要性を、あらためて注目させる契機になるだろう。

註

- (1) 宗淵上人の研究書に、百回忌を記念してその学徳顕彰のために編まれた論集『天台學僧宗淵の研究』(眞阿宗淵上人鑽仰會、一九五八年)がある。
- (2) 『北野誌』北野文叢上 地、國學院大學出版部、一九一〇年。
- (3) 『神道大系』神社編十一 北野、神道大系編纂會、一九七八年。
- (4) 恩頼堂文庫研究会編『四天王寺國際
佛教大學所藏 恩頼堂文庫分類目録』四天王寺國際
敎大學圖書館、二〇〇三年。夙に『紀元二千六百年記念 宗淵上人頌徳展
覽會目録』(官幣中社北野神社、一九四〇年)、前掲『天台學僧宗淵の研究』
所収「竹圓房藏書寫本現存目録」に、猪熊信男蔵として目録化されている。
『日蔵夢記』と題されていたと考えてよいだろう。『愚管抄』にも「日蔵ガ
夢記」と見えている。山本五月(『日蔵夢記』の成立―『北野文叢』所収
永久寺本を中心に)、『天神の物語・和歌・絵画―中世の道真像』勉誠出版、
二〇一二年、初出は一九九八年)参照。
- (5)

- (6) 同様に、「十二」の十も落ちている。
- (7) 西来寺に伝わる『三庫書目』（弘化二年、表題は宗淵自筆）第四冊目に「北野文叢／版下 四」と見えることから、宗淵のもとで開板が構想されていたことが確かめられる。
- (8) 猪熊信男「^{北野}宗淵上人の學徳を偲びて」前掲『天台學僧宗淵の研究』附録の講演筆記。
- (9) 試し刷りの一紙。縦二七・九糎、横四〇・三糎。
- (10) 前掲『神道大系』真壁俊信「解題」ほか。
- (11) 宗淵筆『示水遺影 書写目録』（四天王寺大学図書館恩頼堂文庫蔵、整理番号一一一四）によれば、宗淵の蔵書に『扶桑略記』が存し、醍醐天皇の巻である第廿三（上下合冊）と第廿四が揃っていたことが知られる。
- (12) 坂本健一「宗淵上人と北野學堂本」前掲『天台學僧宗淵の研究』所収。その目録に、『日藏夢記』がどのように記載されているか気になるところだが、確認を得られていない。
- (13) 前掲猪熊信男講演筆記。『示水遺影 消息集』（四天王寺大学図書館恩頼堂文庫蔵、整理番号一一一五）に収められた光乗御坊宛の手紙には、校合や他人の著作の手伝い、人の伝授物やそのほか様々な吟味がみな己の学問になるのだと記されており、宗淵の学問姿勢を垣間見ることができる。
- (14) 嘉永五年に聖廟九百五十年御忌を迎えた宗淵は、二月一日から二五日まで本宮に参籠して菅家文章を奉読し、それに校合を加えたうえ、菅家後草をも書写し、あわせて北野天満宮に奉納している。二月二五日には、御忌法楽に発句二五首和歌五十首を詠んだ。このほか、天満宮御物松風硯を模造して出自である北野光乗坊に納めたり、北野聖廟種子曼荼羅（一枚）の刊行を行ったりなどしている（『眞阿宗淵上人年譜』前掲『天台學僧宗淵の研究』所収）。それは、宗淵六七歳のことであった。『北野文叢』百巻の奉納を成し終えたあともその補訂や開板を目指した宗淵にとって、『日藏夢記』の識語に、太政威徳天（天神）の浄土に生じてその眷属の一人に連なりたいと記した願いは、切なるものであったに違いない。
- (15) 当該本文は、従来『日藏夢記』の成立時期を探る検討材料となってきた箇所でもある。再検討がうながされるだろう。
- (16) 山本五月「日藏説話の変容と『北野天神縁起』——メトロポリタン美術館本

- を中心に」前掲『天神の物語・和歌・絵画——中世の道真像』所収、初出は二〇〇一年。
- (17) 阿部美香「浄土巡歴譚とその絵画化——メトロポリタン美術館本『北野天神縁起』をめぐる」『説話文学研究』四五、二〇一〇年。
- (18) 川崎剛志「院政期における大和国の靈山興隆事業と縁起」阿部泰郎編『中世文学と寺院資料・聖教』中世文学と隣接諸学2、竹林舎、二〇一〇年。なお、『日藏夢記』は、吉野を介し、西行学の研究からも注目されつつある。西澤美仁「天神信仰と『西行』」『西行学』六、二〇一五年。
- (19) 『扶桑略記』が『日藏夢記』の抄出であることは、山本五月『日藏夢記』と天神信仰の形成——太政威徳天の姿と言葉（前掲『天神の物語・和歌・絵画——中世の道真像』所収、初出は二〇〇四年）により明らかにされている。

付記

貴重な書物の調査に際し御厚意を賜りました 北野天満宮権禰宜加藤晃靖氏、京都大学名誉教授藤井讓治氏、西来寺住職寺井良宣氏、圓解院住職杉谷秀也氏、四天王寺大学図書館、並びにご教示を賜りました国文学研究資料館小林健二氏、落合博志氏に、深く御礼申し上げます。また本稿は、JSPS科研費（15K0225）の助成を受けています。

脱稿後に、京都府立総合資料館所蔵『内山永久寺上乘院蔵書』（江戸時代末期写）に「日藏夢ノ記 欠本一卷」とあるのを確認した。永久寺側での伝来とその書名を伝える本資料は、書名確定の根拠となり得る手がかりとして注目される。

【翻刻凡例】

- 1 底本のすがたをできる限り伝えるよう努め、影印を付し、行取りも底本に従い、一紙ごとに「」を置いて通し番号を付した。
- 2 誤字・脱字など表記の乱れは訂正されたが、「菩薩」「菩提」等の合略異体は、これを開いて示した。
- 3 見せ消ちや欄外注記により訂正されるべき箇所は、訂正後の本文を示した。
- 4 破損の箇所は、その範囲を空格で示した。
- 5 墨痕から推測される文字は、右傍に（ ）に括るか（カ）として示した。
- 6 区切り点の如き符号は、文字と判断せず割愛した。

心記

自今以去延壽十六年矣

心門椿山寺剝駁方家新絕指

頻沉病瘳悲泣不休因之以

年中一股痛攀不憊自彼入

既及十二箇年也年來天

如死加以為松物恆夢想餘往不休天文陰陽頻告不祥

為蒙靈驗之助極萬事攀登此山後深弥深入念勤修精進

乞則為先鎮護天下後利念身上也即捨離童子擔肩佛給

獨踏雲根尋到生窟姑自去四月十六日安居苦行二時誦

法花涅槃三時修真言大法至去七月中維安居已滿頻被

風雨不能歸去又時來同行沙弥安与自巖落万死一生不

年之秋此山勤修

隨見觸圓身

隨見觸圓身

隨見觸圓身

隨見觸圓身

隨見觸圓身

隨見觸圓身

隨見觸圓身

能然居依有此保障更能三七日不言新食一心念佛于時八
月一日午時許居壇作法之間枯槁忽發喉舌枯燥氣息不
通竊自思惟既言不言新食何得呼人洞喉作是思惟之間
出息已斷也即命過生立巖外擔肩佛經如入山時眼聞四方
見可行方之間目嚥肉一禪僧出來手執金瓶盛水與弟子令服
其味入骨髓甚甘苦也其禪僧云我見執金對神也常信此
窟尺迦遺法守護我感上人年來法施忽往雪山取此水而
施之已又有數十丈童子種々飲食感大連葉梅持侍立禪
僧云是所謂八部衆也三須臾之間後西巖上一宿德和上來
下即申左手授弟子令執相導直道攀於巖上窺雪數千丈
適至其頂見即一世界皆盡下地也此山極窮勝也其地平正
純一黃金也光明甚顯耀菓樹悉七寶金樹開銀花銀樹室金
果雜色法嚴甚微妙也北方有一金山其山之下有窟其內居

大種之病瘰皆是七寶也其中有七宮高座和上至了樂其座
左右有十二枚琉璃床有一百廿
面在莊寶榻其數百千有三

上散如羅漢又南

有西方七教坊舍皆是郭寶一
猥雜四方莊嚴不可稱盡為何許

一榻其榻白玉也文和上云仙子

一坐衣一力戒王芥也此云金

千紙香品花連燒香散花其香

心甚快樂也仙子即起合掌唱言

升言仙子是聽我化汝宿上之事汝

生乃作孔雀身生席訶下那國航身聚

涅槃感悅即死依同經力忽捨身乃生尸那

那法陀涅槃經自誓言我生得男乃常讀持

力轉女乃來生此山名曰道賢余時汝遇毒龍之精殺害而

忽現於中手授汝龍尺我手不能容汝仙子汝得人身三股執
執我手兩度汝依先生權能力又成仙子愛樂信我淫怪汝被
僧先世因初少年我山入來出家入道絕穀苦行汝常指我為二
親我之愛汝如一子仙子汝果寂靜念仙從汝志言者
久慎不得教還現汝餘命非幾幾命終
仙子言愚暗之力不惜命盡但恐速立道恒
仙也示其餘等又歸何佛從何行當得增壽命并取短札記
八字賜之其文云曰戒九三年月王汝并曰仙子汝命如浮雲
懸山難散浮雲易斷汝命之命在山從行長遠也住里則忘
短也曰戒名何同尊與汝也依尊與汝早改汝名九
也年月名長短也王汝名加被也汝汝并為珍重之
仙子言不知汝并名是也并曰諸并多日本國興仙行傳
汝汝名仁敷上人是也從山多有并權才弘仙利世人回不
和也省繁并时有自然光明照耀其光五色也并曰日本太政

威德天來也。須臾之間，從西山虛空中十萬人衆來，宛如大日。即位行幸之儀式，太政大臣從其轡下，詣并前，替首頂禮。而無半死化力，藏之大井，即就南方北面，長跪見其容儀。形如二玉偶，侍從者屬異類，雜形不下，膝計或如金對力士，或如雷神。鬼王夜叉，亦甚可怖畏，各持弓箭，持鎗，量鍾杖也。太政大臣親向并，密言其辭，未詳。經一時，許大臣欲退出，時見仙子云：此仙子欲相示我所住大威德城，還遣如何。并行之，即相共乘一白馬，近於大政天，輦行之。教百里有一大池，廣大不知邊際，宛如大海，有微妙蓮花，其類身更遊池邊，及皆金色也。光明照耀，有无数龍，其池中有一大嶋，底百里許，白琉璃為地，玉樹行列，有无数量之，過難窺，其菓實香遍滿其嶋，中有八峯七寶宮殿，而開戶，照无数花，器幢幡，又外種之，飲食具內有八時許，方壇之中，有一蓮花，其蓮花上有寶塔，其女皆妙法蓮花，體金色，玉軀也。東西懸兩部，大暑茶羅，微妙莊嚴，不可稱。

五也又見北方相去一里許有一大城垣牆甚壯耀應是火改天
宮城皆入又改城唯大天一人在此鳴中大天曰此鳴我作意
指念要也。大天即礼三寶。曰我老上人。今國管承相也。我當
初愛別離苦之悲。上人聞不我恥。舊怨常新。每有好事談者。
非不動我心。故我欲惱亂。臣君損傷人民。殊滅國亡。卅三天我字
曰不。太改滅。往天我主一切疾病災難事。我初思念用我生
弟不流之淚。必滅沒。故國遂成水海。經八十四年後。成立國云
為我住城也。云彼所有青骨龍。猶未滅。流布密教。我素愛重
此教。故昔怨心十分之一息也。加以化力。并無悲願。力故假神明。或
在山上林中。或住海邊。河岸各盡智力。常慰養。故未致巨害也。
但我眷屬十六萬八千惡神。亦隨受致損害。我尚難禁。況係
祇乎佛子。言我本國之人。上下但稱火雷天神。尊重於世。焉
何故有此怨心乎。大改天曰。彼國我為大怨賊。誰人尊重而彼火

雷火氣毒王我第三使者名也自我不成仙之外何時忘此舊
惡之心也若有居在王時所帶官位者我必令傷害之但今日為
我上人遺一書云有人信上人傳我言作我形像稱我名號
有怨惡新請者我必相殺於上人耳但上人有短命相慎精進莫
懈怠佛子言金峯并賜此短札未知其意歟解尺之大段笑
讀其札文云曰歲九々年月王設即尺曰日者大日之日也歲者
胎藏之歲也九々者八十一也年者八十一也月者八十一也王
者藏日之王也議者守護之議也言歸依大日如來持胎藏
大法金峯八十一也但如沈微行延壽九々年亡懺悔急修為九
月即蒙歲王守護也自今日後改今名稱曰歲尊猛精進不
能懈怠佛子奉教命已了還至金峯如上披陳也并曰我為汝
令知王間災難根源在遣三并又曰仙子汝見斗中天天不蒼
見之并申年教西南方空見指末即至斗平天遙見有七寶
垣其光甚朗耀也垣上垣傍有无数億千寶樹仙子經寶林中

形至一萬梯下千萬億寶珠以為莊嚴妙是梯閣其數不可稱計也
一、梯前寶林間有流泉浴池以无量寶樹交雜莊嚴其水色極
之深映徹其上上有无量寶梯一、梯下生寶蓮花其蓮花
上有數十天女以七寶璫路莊嚴其方出微妙音歌詠遊戲三摩
中无量樂音又寶林間之數百千男女交接快樂仙子臨寶泉
上洗手灑口其水香美凡界無比類乃以瓶盛合掌佇立時六人
人从天女來圍遶仙子讚嘆讚嘆仙子同此七寶梯閣是何物第一天女
以和歌答之いよよ五十分白玉枯不付人入いよよ久門也波良良奴
云天共教之いよよ又見從西方一天人來容儀甚端正數十天女圍
繞之見仙子曰我是同本近王東宮太子也壯正直愛樂佛
法於此天受也又見一天人來諸天女圍繞見仙子曰我是同
本大將也我在王時師保仙計不信邪計盡忠竭孝不狂不
右此天我舊宅堅純金明王我朝夕所持念供養也云諸多省
慧又見靜觀之賢正寶小僧正寬平令小老僧共來執いよよ仙子讚

之善哉之我金峯寺在祇園力得詣此天甚希有也甚奇特也
當共入內院禮拜天主即相引共入內院莊嚴不可勝計有一
師子座高丈如山教妙寶嚴飾七寶大蓮花開敷饒其
座其上虛空有微妙大寶帳一百千萬妙毫飾之真珠
羅網懸之量寶鈴量天人人可恭敬國使之教天女執
妙蓮花我執白拂三方彩蓋有之教楊國大摩尼珠周匝
飾莊嚴不可具述大寶座上有金色妙蓮花其蓮花上有真
金色光懸湛寧清淨眼界不能見此即慈尊妙色也
子立祈投地恭敬禮拜即自光明中有音告曰佛子汝時未至
早歸奉去隨天巡遺教勅修精進不行放逸世涯畢後復生
於我天也其音聲柔軟和雅聽即流淚不覺即生至金峯
白斗亭天既見終昔之汝隨我教精進此生已後可止生彼天
此不樂乎昔之汝之憾破惑不隨我教當隨地獄其地獄相

及闕羅王界見不答言欲見并即申手教北方幽邃之黑
山与栢道現力即在闕羅王宮其宮城大梓如我王王宮城四
面若有三高栢種之器杖陳列有數千侍衛之朱雀木路左右
有无數百千罪人名被枷械枷鐐其中相和相見之人數多也
婦哭若惱之聲不可數聞又次有栢門陳列百千梓安量數
十數數百兵衆侍衛之內有何人乞來乎答言自金峯山來也
即許入之又見有栢門其內有數百千女人形如天女仙子隱
扉之外佇立王這見而自階下相向拜揖曰禪僧何處來答
曰金峯山上內名何答名曰戒金對戒王勅号也王上言
實我帝闕禪僧之甘為不作幾何答不作不多唯隨分
微小善不敢犯大罪王曰禪僧皆不在何物答曰入山日持
經栢仙亦也上問何亦仙行答曰大日尺迦旃勅觀音亦傷又
有部諸多終之界位羅之小字涅槃寔勝仁王金對理起

般名亦能之三部大注儀軌次亦大仙頂隨求梵大位羅尼
 日新而轉讀如此亦能也。王即合掌頂受執手相遵。楷記
 玉床款六體。蒙歡因注要即累從涅槃諸行。雲常如木
 泥涅槃偈。又後付此仙步量。亦誦无所不至。皆秘密不
 聞。王即起立禮拜曰善哉。誠仙子也是可。生得去天堂之人
 也。非閻羅王界所曾何故來生此。因那仙子。金對戒王祿道
 力而至也。唯欲見地獄苦。因即勅一朱衣臣名曰獄領曰。將此禪
 僧。遍示地獄之苦。王即起立。與獄領共出城。北門數十里。遠見
 有鐵山。獄領曰。彼即地獄城塙也。至。見即有一大城。大禪如大省
 七重鐵垣。其垣每間有無數刀山。無數鈎樹。又七重鐵網。陳覆城
 上。其城有四門。每門有四大狗。其形如山。眼如電。牙如鉅。其
 吐毒即令遍滿城內。又有無數獄卒。其形牛頭。人面。如利
 形。一牙有八頭。九尾。每頭有十八角。面每有八眼。八千四眼也。

一、眼中出鐵丸如電雨言音如霹靂百千恐怖之事宛如
諸佛諸仙子同歎領云此城中有樂苦不答有十八苦而一苦
可苦有十八苦事云如是十八苦事充滿其中下火鐵上之火
徹下其中大苦毒不可具說云仙子報云地獄城不能入地
獄領云何方便入此城中當見受苦眾生答云地獄城中門要
偏可粘大乘真言云我暫毀火炎隨其言即於中門初為金
鐵合掌誦陀羅經縣首題名号六字轉觀誦无所不至皆勝
仙頂亦諸約一時斂火毒城中清涼即入口誦寶号真言次第迴
見受苦之所有無數億眾生不可說大苦毒了障中皆有在
時相和男女而受大苦毒見仙子至各每曰救我云或呼父母
兄弟呼師儒同行或呼妻子眷屬其悲訴辭不可具說云初見
一口山火炎甚熾盛也其刀山下有無數刀痛云向多有裸形眾生
獄領曰是名刀山炎樹熾苦所致世人墮而亡其受苦時名刀痛

被割截支節作八万四千以一日一夜間六十億生六十億死、
如此一、地獄相不可言也。況累之、次廣至鐵窟苦所有四鐵山相、
四五丈許其間有一第屋、中有四箇人其形如灰一人有衣覆、
背上余三人裸形也。躡居去灰曾无床席悲泣焉。自獄領有
衣一人上人本國近我王余三人其臣也君臣共受苦、王見仙乎
相招徐仙子即入第屋敬屈奉王曰不可敬實逢之罪為主
不為貴賤我豈曰本金對學太子之子也然為墮此鐵窟苦而
我居位年尚矣其間能種之善之造種之惡之非先熟感得此
鐵窟非出鐵窟之後善法愛重故當生他樂天、仙子言大
王治天下間犯重倫何故墮此不自他作業重故墮此歟而其
他名太改天也其天神以怨心令燒滅仙法損害衆生其所作惡
報物來我不我為其怨心之根本故詔太改以下十六万八千惡報
為其眷屬令報怨我王父法王天照勸誘奈彼天神遮妨其
惡難然其十六万八千鬼兵作惡不心是故我苦相續不斷何

付生化樂天父子苦愛樂我生前犯罪取大有五皆是因太
 改天之事也今悔不及令我父行仁得溫主事矣險路行步心
 祇困苦其罪一也自居高殿之臣父生下地焦心落淚其罪二也
 賢臣事沒流其罪三也久貪國位得怨喊其罪四也今自之
 怨敵損他衆生其罪五也是為根本自余罪杖某兄量也安若
 全休息苦哉悲哉地獄衆人還出期遠寧誰傳此事今聞余上
 人來還向諸君喜一二陳而之努力之如此辭可奏之上我力五
 鐵窗受大苦毒切主居位安隱不主我力切之辛苦早救諸
 翁又攝政大臣可中為我苦起立一萬平都婆可給三千度者
 一之塔婆行乞得解首題如來陀羅及諸行之常求一偈并仙頂隨
 求之而不求其大秘密令納七道諸國名之各山大海大路邊起立
 一日同時之供養給其度者諸寺諸山練淨清淨沙弥近士樵采一
 日之度智利具足之名僧三百口清三千人度者大極殿亦可概仙
 名懺悔之法又國母可白不記我深隨我弟四親王婦仙愛行

念一切世教及我所存心又曰我多歲受苦今遇上人暫得休息
定和我離苦日欽願我上人我及三臣并一切眾生為斷穀无言
方底仙名號書主上國母御服用一万三千仙蓋宮京內五幾
諸國遊引万民引車可獲懺悔之計以種香花飲食伎樂歌
頌一万三千仙方底仙名號可供養此一万三千仙養我及三臣
早出鐵窟我生化樂天臣亦可生切利天假令雖不投我妻子
眷屬救濟先深相持上人校者之善鐵窟相煎之計也雖不
能万善亦可獲此計努力之仙子弟送出屋外即時回山一合也
此和四仙至鐵窟內數百人中有一僧在立時就化宗也佛子見
者不化如此則見了出地獄城中火炎熾盛為今獄領之地獄人量
也我六領此天城即相共至玉皇殿王即合掌讚希有之
其仙子即身見天堂之見地獄轉至按潘京生仙子同歸歸玄
昂在金華井口出見地獄生怖畏不答多甚怖畏苛官之人不
候因果竟令終時直入地獄如射箭的儒祇切受苦無息故
地獄一日一夜當人及六十小劫如日夜更甚能八万四千大劫如

出經三聖道僅生人道下賤貧窮凶惡後七王父母及一切示
 生苦根之 復次仙子汝見滿德付之天宮城不若之邪見之
 其滿德付之天名曰金剛藏是也從我前玄來汝速往詣
 即申左手教東方見手末即至滿德城之地純一頗梨也城
 北有大小草木花草皆七寶也西有吳竹林廣廿里許其枝莖
 皆有光明如紺瑠璃東南有池其池遍有五色沙光明五色
 正教金銀高唐懸七寶光塔西方寂寂人間奉仕大付師亦教
 時付之天命仙子之我於金華園汝三王之事汝若逢退像
 力思若善利示淨利之教示地獄之怖畏聖旨如是希
 有哉仙子親聞仙聲教甚奇特也仙子見我已久我甚因本
 儒王也我雖不梵以清淨出家一受戒力得生化樂天宮焉
 我住卑少之別城為遮心彼大政天之惡也彼天祿常為
 日今霜電而常摧國云我甘露而常利人民但彼國人民
 誦狂邪之心滅威故彼惡祿之勢力日新也正直正見邪希

有故我亦善祚威光少悲哉欲何為乎彼日本大段天
名管公是也惟公矚目如金書嗚呼苦哉我之災厄何為連
何愛別離若之大若然哉也哉必報怨如是念畢含怒終其
公宿有福智力故即成大威德天神其威德自在勝諸天神
即思惟凡國云安隱者因彼仙什人民威威名為有衣食
我之沙衣食便損滅人民以仙什青珠威國云即與其蒼屬
十六萬八千毒龍惡鬼水火雷電風伯雨師毒害邪神並
諸去邪大災害國云舊善神不遮心又玄延長八年夏震
害清貫希主相臣亦又號教美怒忠魚及燒損化量連
安曇宗仁亦即此天第三使主火雷火氣毒王之不作也其
日收氣初入我延喜王身內六府悉爛壞也自余彼王遂命
終之燒巨崇禍付隆東大近曆檀林亦臨大寺是即使主
不作也如是惡神亦威付害主之我延喜王獨受其殃祥如
衆川之水吞一大海也又自余脊屬皆與彼火雷王其數

景

計或崩山振地壞城損物或吹暴風降疾雨人物併
損害或行疫病火死之病或令戒者發亂逆之心或令大
人祿朝拜之亂凡國云天下一切不祥十六方八十惡祿所
作大改天能制心若干眷屬至制心必是災害非專當
時各非盡大王福非盡公卿運以此目今大改天忽怨所
致也金峯八幡亦諸大并亦我滿德天堅執不許改不能
自由而已而物天下愚人不和災難之源於鎮設善祿還
要損害之各甚可憐哉此天神心為根本一切災難爭
競云以何方便檢濟之今須調和坡大改天王怨心急
之按若彼云三仙子女我此惡難教當獻于上并極改
大臣宜早為先帝甘天及天下安隱造立天祠勅諸
坡人以天謝答祈禱告從山北建立一小天祠擇永清淨
持律僧一口之便其祠謝答祈禱何者坡大改天常位

而分於南西二方諸國改其天祠為庭樹之通橋左
右花樹栽列可步大威法天祠又天津北極一小天祠建
立大天於其前老祠東北二方諸國之改故置清淨僧口
耐各祈禱可号曰奉大天祠又此天祚廟位愛頂設雷
峯常城中控引荒峨野徧非行故其正宮建立大威法
城可相偶其奉城大海中竈塢也故可建立水中大澤池
是相連地也其池正中為一小嶋築堅已了其地難人昇
踏但除建立間其宮殿建八面梯閣八方開戶一切莊嚴如
彼奉城周帀作軒廊高不過閣八面開戶嶋形如壇出水
不高奇巖立列樹栽於其池塘上以為馬場多栽花樹
可為路塢東西建立二幢其上安日月形家象形鑄造之
二其池北山建立一小堂安置立大明王并後世一切天佛之
東方作我滿德法王天佛西方作收日本太政天佛各

形如東西二日但東方乘龍西方乘鳳為其小堂
左右建立一祔殿天下諸神自來位此我二天所在之處切
祈明光不來在其城可号曰奉天殿威懷天下古一切災難二
天前祈願自然消滅我与此天行住坐卧同共一處為應
設國也欲祈諸名常以四月十月十五日減設青果公
卿相共行養三寶及二天又每年正月一日大王自率可祈
年中祥福量許行便以此可修法在三昧又置何國黎
口之微王書大注又以此兵士街設之又改天慶三年為太
政元年改大臣号永為極政大臣近古通宮為太政大臣天
下大政天之心也一切王計不遠舊式又道俗成業有才沉溺
名欲司有勞各宜有慶賀大赦天下如常以忠謹之心微如
是之善天下太平災難已銷又金峯淨刹消除極金之根
至於胎陰奴稚壞切金峯王下據此權親年在我所奉之
尊也四時之中其三時一切道俗悉會行養奉杜滿飲唯

尊也四時之中其三時一切道俗齋食什養奉仕滿敬唯
嚴寒時無人承事年分度者一人置冬籠師子号香燃
什養天下鎮設僧乞彼王上及臣下不見用我愚熱之教
誨仙子汝為俗降三寶為救彼眾生寧不讀誦經典專
一可營此天祠之事也仙子之貧道無力年堪此事小堂
建立未半况此大事乎天王曰汝无主問之福猶削出王
之富須寧一切四眾為己方為天下誰不乞直汝若不依我
此誨之我為大障當妨汝修道冬籠之事若不採用之
汝當誰可奉仕之汝若我言信邪我當為汝作外役若我
捨化樂天勝樂住此卑少城是乃利物役國也我除念彼
日本奴照勲傳此法固要方而亡我子孫親睦人何不蒙
憐乎仙子奉天王命已了即至本堂教處以上事云
中金對戒王曰并我今汝知王問矣教眾生若惱之根源
底作仙事利益眾生故乞一切普聞知宣即中手摩頂曰

人力難得汝已得之仙力難見汝能見能復三業不復放
還於地獄往生天堂宣教授既畢重教歸洛起入巖穴
即得獲生也于時八月十三日寅時也入死門而死十三箇日
具足來僧侶五箇人日記也

右一卷大和國內山永久寺所藏千歲嘉永四年秋八月
不圖感得寫之雖末法以威神方可護而存者乎
實 昔神御岳跡之因緣可畏可仰幸受生
之生者預 上改天化益可生具淨土連列着
屬之一人者也

【翻 刻】

〇〇夢記

〇〇賢今以去延喜十六年〇〇名日藏「

心門椿山寺剃髮出家斷絕塩「

頻沈病痾悲泣不休云々因之以「

年中一股躋攀不倦自被入「

既及十六箇年也年来天「

如死加以為私物恠夢想紛紜不休天文陰陽頻告不祥〇

為蒙靈驗之助拋万事攀登此山從深弥深入企勤修精進

是則為先鎮護天下後祈念身上也即捨離童子擔負佛經

獨踏雲根尋到筌窟始自去四月十六日安居苦行二時講

法花涅槃三時修真言大法至去七月中雖安居已滿頻被

風雨不能歸去又時来同行沙弥安与自巖落万死一生不

能起居依有此等障更能三七日無言斷食一心念佛于時八

月一日午時許居壇作法之間枯熱忽發喉舌枯燥氣息不

通竊自思惟既言無言斷食何得呼人潤喉作是思惟之間

出息已斷也即命過出立崛外擔負佛經如入山時眼廻四方

見可行方之間自崛內一禪僧出來手執金瓶盛水与弟子令服

其味入骨髓甚甘善也其禪僧云我是執金剛神也常住此

窟尺迦遺法守護我感上人年来法施忽往雪山取此水而

施而已云々又有數十丈童子種々飲食盛大蓮葉捧持侍立禪

僧云是所謂廿八部衆也云々須臾之間從西巖上一宿德和上来

下即申左手授弟子令執相導直道攀於巖上冠雪数千丈

適至其頂見即一世界皆悉下地也此山極最勝也其地平正

純一黄金也光明甚照耀菓樹悉七寶金樹開銀花銀樹実金

果雜色莊嚴甚微妙也北方有一金山其山之下有窟其内廣

大種々莊嚴皆是七寶也其中有七寶高座和上至了坐其座

左右有十二枝瑠璃床有一百廿「

面在雜寶榻其数百千有三百「

有西方無數坊舍皆是雜寶一「

猥雜四方莊嚴不可稱盡如阿弥〇

一小榻其榻白玉也大和上云仏子「

〇〇是牟尼〇是身藏王菩薩也此土是金「

手執香呂花匣燒香散花其香「

心甚快樂也仏子即起合掌唱言「

〇善薩言仏子諦聽我說汝宿世之事汝「

生身作孔雀鳥生摩訶尸那國耽鳴琴「

涅槃感悅即死依聞經力忽捨鳥身生尸那「

師法花涅槃經自誓云我生々得男身常讀持「

力轉女身来生此山名曰道賢爾時汝遭毒龍之難發聲則我

忽現前申手授汝龍見我手不能害汝仏子汝得人身三股執

執我手兩度汝依先生誓願力又成仏子愛樂法花涅槃汝被

催先生因初少年我山入来出家人道絕穀苦行汝常持我如二

親我亦愛汝如一子仏子汝樂寂靜念仏修法世間無常「

久慎不得放逸況汝餘命非幾競命修「

仏子言愚暗之身不惜命盡但恐建立道場「

願也示其餘筭又歸何佛修何法當得增壽命菩薩取短札記

八字賜之其文云日藏九々年月王護菩薩曰仏子汝命如浮雲

懸山離散浮空易斷汝命亦爾在山修行長遠也住里〇爾力怠

短也日藏者所問尊与法也依尊与法早改汝名九々「

也年月者長短也王護者加被也汝護法菩薩為師重〇受「

仏子言不知護法菩薩名是誰々菩薩曰諸菩薩多日本國興仏法僧

護法者仁敷上人是也諸山多有菩薩權身弘仏法利生人間不

知也云々省繁云々于時有自然光明照耀其光五色也菩薩曰日本太政

威德天来也須臾之間從西山虛空中十万人衆来宛如大王即

位行幸之儀式太政天從其輦下詣菩薩前稽首頂礼曰南无

牟尼化身藏王大菩薩云々即就南方北面長跪見其容儀形如

二王像侍從眷属異類雜形不可勝計或如金剛力士或如雷神

鬼王夜叉神等甚可怖畏各持弓箭梓鞘無量鎌杖也太政天

親向菩薩蜜言其辞未詳經一時許太政天欲退出時見仏子云

此仏子欲相示我所住大威徳城還遣如何菩薩許之即相共乘一白馬近於大政天饗行之數百里有一大池廣大不知邊際宛如大海有微妙蓮花異類鳥交遊池邊及皆金色也光明照耀有無數龍其池中有一大嶋廣百里許白瑠璃為地玉樹行烈有無數量無邊雜寶花菓実香遍滿其嶋中有八峯七寶

宮殿八面開戸懸無數花鬘幢幡又烈種々飲食其內有八肘許方壇々中有一蓮花其蓮花上有寶塔々内安置妙法蓮花經金色玉軸也東西懸兩部大曼荼羅微妙莊嚴不可稱

盡也又見北方相去一里許有一大城垣牆甚照耀應是大政天宮城皆入又彼城唯大天一人在此嶋中大天曰此嶋我作意持念處也^{云々}大天即礼三寶了曰我是上人本國普永相也我當初愛別離苦之悲上人聞不我恥舊怨常新每有故事談者

非不動我心故我欲惱乱臣君損傷人民殄滅国土卅三天我字日本太政威徳天我主一切疾病災難事我初思念用我生前所流之淚必滅没彼国遂成水海經八十四年後成立国土

為我住城也而彼所有普賢龍猛等盛流布密教我素愛重此教故昔怨心十分之一息也加以化身菩薩等悲願力故假神明或在山上林中或住海邊河岸各盡智力常慰喻故未致巨害也

但我眷属十六万八千惡神等隨處致損害我尚難禁況餘神乎佛子言我本國之人上下但稱火雷天神尊重於如世尊何故有此怨心乎大政天曰彼国我為大怨賊誰人尊重而彼火雷火氣毒王我第三使者名也自我不成仏之外何時忘此舊

惡之心也若有居在世時所帶官位者我必令傷害之但今日為我上人遣一誓言若有人信上人傳我言作我形像稱我名号有懇懃祈請者我必相應於上人耳但上人有短命相慎精進莫懈怠^{云々}佛子言金峯菩薩賜此短札未知其意願解尺之大政天

讀其札文云曰藏九々年月王護即尺曰日者大日之日也藏者胎藏之藏也九々者八十一也年者八十一年也月者八十一月也王者藏王之王也護者守護之護也言歸依大日如來修持胎藏

大法全壽八十一也但如説修行延為九々年無懈怠促為九々

月即蒙藏王守護也^{云々}自今日後改本名稱曰藏勇猛精進不能懈怠^{云々}佛子奉教命已了還至金峯如上披陳也菩薩曰我為汝

令知世間災難根源故遣而已菩薩又曰仏子汝見斗率天不答令見之菩薩申手教西南方空見指末即至斗率天遙見有七寶垣其光甚朗耀也垣上垣傍有無數億千寶樹仏子經寶林中漸至一高楼下千万億寶珠以為莊嚴如是樓閣其數不可稱計也

一々樓前衆寶林間有流泉洛池以無量寶樹交雜莊嚴其水色種々光深映徹其水上有無量寶樓一々楼下生衆寶蓮花其蓮花

上有數十天女以七寶瓔珞莊嚴其身出微妙音歌詠遊戲亦虛空中無量衆音又寶林間無數百千男女交接快樂仏子臨寶泉

上滲手瀨口其水香美凡界無比類身心歡喜合掌佇立時十六人入天女來圍遶仏子讚嘆仏子問此云七寶樓閣是何物一第一天女以和歌答之五十八ノ白玉怙不付^{キス}人ノ入^リ久^ル門^ニ也波安良奴^ト

云天共散之^ぬ又見從西方一天人來容儀甚端正數十天女圍繞之見仏子曰我是日本延喜王東宮太子也性正直愛樂佛法故生此天處也又見一天人來諸天女圍繞見仏子云我是日本大將也我在世時歸依仏法不信邪法盡忠竭孝不狂世務

故生此天我舊宅坐純金明王我朝夕所持念供養也^{云々}諸多省繁^{云々}又見靜観々賢正寶等僧止寛平全等老僧共來執仏子讚云善哉々々我金峯牟尼神通力得詣此天甚希有也甚奇特也

當共入内院礼拜天主即相引共入内院莊嚴不可勝計有一師子座高大如山無數妙寶嚴飾七寶大蓮花開敷繞其座其上虛空有微妙大寶帳以百千万妙花飭之以真珠為

羅網懸無量寶鈴無量天人大衆恭敬圍繞無數天女或執妙蓮花或執白拂三方行立有無數樓閣大摩尼珠周巾嚴飭莊嚴不可具述大寶座上有金色妙蓮花其蓮花上有真

金色光凝湛最清淨眼界不能見此即慈尊妙色身也仏子五躰投地恭敬礼拜即自光明中有音告曰佛子汝時至早歸本土隨尺迦遺教勤修精進不行放逸生涯畢後宜生

於我天也其音聲柔軟和雅聽即流淚不覺即生至金峯

白斗率天既見終菩薩云汝隨我教精進此生已後可必生彼天豈不樂乎菩薩亦云汝无懺破戒不隨我教當墮地獄其地獄相及閻羅王界見不答言欲見菩薩即申手教北方幽邃之黑山与指道現身即在閻羅王宮其宮城大跡如我世王宮城四面各有三高樓種種器械陳列有数千侍衛之朱雀大路左右有无数百千罪人各被桎械枷鎖其中相知相見之人數多也號哭苦惱之聲不可敢聞又次有樓門陳列百千桎安置數十數數百兵衆侍衛之問云何人是來乎答言自金峯山來也即許入之又見有樓門其內有數百千女人形如天女仙子隱扉之外佇立王遙見而自階下相向拜揖曰禪僧何處來答曰日金峯山亦問名何答名曰藏金剛藏王勅号也王亦云

我常聞禪僧亦生前所作幾何答所作不多唯隨分

修小善不敢犯大罪王曰禪德背所在何物答曰入山日持經持仏等也亦問何等仏經答云大日尺迦弥勒觀音等像又

兩部諸尊種種々曼陀羅亦小字涅槃最勝仁王金剛理趣

般若等經亦三部大法儀軌次第等大仏頂隨求梵大陀羅尼

日料所轉讀如此等經也^{云々}王即合掌頂受執手相遵々楷^礼

玉床歎喜讚嘆欲聞法要即畧說涅槃經諸行無常如來

證涅槃偈等又讀法花經壽量品等誦无所不至尊勝秘密等

閻王即起立礼拜曰善哉々々誠仏子也是可生淨土天堂之人

也^{云々}非閻羅王界所曾何故來生此間耶仏子云金剛藏王神通

力所至也唯願見地獄苦蘊即勅一朱衣臣名曰獄領曰將此禪

僧遍示地獄受苦之處即起立与獄領共出城北門数十里遙見

有鐵山獄領曰彼即地獄城牆也至了見即有一大城大跡如大山有

七重鐵垣其垣每間有無數刀山無數劔樹又七重鐵網弥覆城

上其城有四門每門有四大狗其形如山眼光如電牙齒爪如鉞吐火

吐毒即令遍滿城內又有无数獄率其形牛頭人身如羅刹

形一身有八頭九尾每頭有十八角面每有八眼八々六十四眼也

一々眼中出鐵丸如電雨言音如霹靂百千恐怖之事宛如

諸經論仏子問獄領云此城中有幾苦所答云有十八苦所一々苦

9

所各有十八大苦事^{云々}如是十八苦事充滿其中下火徹上々火徹下其中大苦毒不可具說^{云々}仏子雖見地獄城不能入語

獄領云以何方便入此城中當見受苦衆生答云地獄城中門而可誦所持大乘真言等我暫斂火炎隨其言即於中門狗前至

誠合掌誦法花涅槃首題名号亦入字轉觀誦无所不至尊勝

仏頂等諸狗一時斂火毒城中清涼即入口誦寶号真言次第廻

見受苦之所有无数億衆生受不可說大苦毒一々隔中皆有在々

時相知男女而受大苦毒見仏子至各每口云救我々々或呼父母

兄弟呼師僧同法或呼妻子眷属其悲訴辞不可具說^{云々}初見

一刀山火炎甚熾盛也其刀山下有无数刀輪々々間多有裸形衆生

獄領曰是名刀山炎樹熾苦所殺生人墮所也其受苦時者諸刀輪

被割截支節作八万四千段一日一夜間六十億生六十億死^{云々}

如此一々地獄相不可具說畧之 次復至鐵窟苦所有四鐵山相去

四五丈許其間有一茅屋々々中有四箇人其形如灰一人有衣覆

背上余三人裸形也蹲居赤灰曾无床席悲泣嗚咽獄領曰有

衣一人上人本國延喜王余三人其臣也君臣共受苦^{云々}王見仏子

相招給仏子即入茅屋敬屈奉王曰不可敬冥途無罪為主

不論貴賤我是日本金剛學大王之子也然而墮此鐵窟苦所

我居位年尚矣其間縱種々善亦造種々惡々報先熟感得此

鐵窟報出鐵窟之後善法愛重故當生化樂天^{云々}仏子言大

王治天下間犯重倫何故墮給此所自他作業重故墮此獄所其

他者太政天也其天神以怨心令燒滅仏法損害衆生其所作惡

報惣來我所我為其怨心之根本故詣太政以下十六万八千惡神

為其眷属含恨報怨我聖父法主天慫慂誘喻彼天神遮妨其

惡雖然其十六万八千鬼兵作惡不止是故我苦相續不斷何

時生化樂天父子苦愛樂我生前犯罪取大有五云皆是因太

政天之事也今悔不及令我父法王深温世事^{如天}險路行歩心

神困苦其罪一也自居高殿令聖父坐下地焦心落淚其罪二也

賢臣事沒流其罪三也久貪国位得怨滅法其罪四也令自之

怨敵損他衆生其罪五也是為根本自余罪枝葉无量也受苦

10

12

13

無休息苦哉悲哉地獄來人還出期遠寄誰傳此事念間今上人來還向逢令喜一二陳而已努力々々如我辭可奏主上我身在鐵窟受大苦毒幼主居位安隱不坐我身切々辛苦早々救濟給又攝政大臣可申為我苦起立一万率都婆可給三千度者

一々塔婆法花涅槃首題如來證涅槃及諸行無常等一偈并仏頂隨求無所不至等大秘密令納七道諸國各々名山大海大路邊起立一日同時令供養給其度者諸寺諸山練行清淨沙弥近士誓求一日令度智行具足名僧三百口請三千人度者大極殿前可修仏名懺悔之法又國母可白云々不記我深隨喜第四親王歸仏愛法念々功德数々及我所云々存心又曰我多感受苦今遇上人暫得休息定知我離苦日歟願我上人我及三臣并一切衆生為斷穀无言

方廣仏名經書主上國母御服用一万三千仏圖宮京内五畿諸國遊行万民引率可修懺悔之法以種々香花飲食伎樂歌

頌一万三千仏方廣仏名經可供養如此一万三千供養我及三臣早出鐵窟我生化樂天臣等可生切利天假今雖不彼我妻子

眷屬救済先深相侍上人拔苦之善云々鐵窟相應之法也雖不修万善必可修此法努力々々仏子涕泣出屋外即時四山一合也

次第廻轉至鐵九降所数百人中有一僧在世時能化宗也佛子見省不記如此巡見了出地獄城中火炎熾盛如本獄領云地獄无量也我只領此一大城即相共還至閻羅宮王即合掌讚了希有々々真仏子即身見天堂亦見地獄精進拔済衆生仏子聞了拜歸去即在金峯菩薩曰汝見地獄生怖畏不答云甚怖畏菩薩曰若人不信因果者命終時直入彼地獄如射箭經僧祇劫受苦無息彼

地獄一日一夜當人間六十小劫如此日夜受苦經八万四千大劫得出如此經三惡道僅生人道下賤貧窮汝精進拔七世父母及一切衆

生苦根云々復次仏子汝見滿德法主天宮城不答云願見之其滿德法主天者日本金剛藏王是也從我前去來汝速往詣

即申左手教東方見手末即至滿德城々之地純一頗梨也城北有大小草木花菓皆七寶也西有呉竹林廣廿里許其枝莖

皆有光明如紺瑠璃東南有池其池邊有五色沙光明亦五色

14

正殿金銀高廣懸七寶花鬘西方寶殿人間奉仕大法師等无数時法主天命仏子云我於金峯聞汝三世之事汝若逢退縁為恐告善利示淨利令歡喜示地獄令怖畏聖旨如是希有哉仏子親聞仏聲教甚奇特也仏子見我已久我是日本僧王也我雖不梵行清淨出家一受戒力得生化樂天處然而我住卑少之別城為遮止彼大政天之惡也彼天神常為

日本霜雹而常摧國土我甘露而常利人民但彼國人民諂狂邪之心熾盛故彼惡神之勢力日新也正直正見行希有故我等善神威光少悲哉苦哉欲何為乎彼日本大政天者菅公是也惟公瞋目如念言嗚乎苦哉我実无犯何為連何愛別離苦之大苦怨哉悲哉必報怨如是念畢含怨終其公宿世福智力故即成大威德天神其威德自在勝諸天神即思惟凡國土安隱者因修仏法人民熾盛者為有衣食

我令斷衣食便損滅人民斷仏法音殄滅國土即与其眷屬十六万八千毒龍惡鬼水火雷電風伯雨師毒害邪神等遍滿土行大災害國土舊善神不遮止又去延長八年夏震害清貴希世朝臣等又蹴殺美怒忠兼及燒損化景連安曇宗仁等即此天第三使者火雷火氣毒王之所作也其

日彼氣初入我延喜王身内六府悉爛壞也自爾彼王遂命終亦燒亡崇福法隆東大延曆檀林等諸大寺是即使者王所作也如是惡神等滅法害生之我延喜王獨受其殃譬如衆川之水吞一大海也又自余眷屬勢与彼火雷王其数難計或崩山振地壞城損物或吹暴風降疾雨人物併損害或行疾病火死之病或令戒者發乱逆之心或令大人條嘲嘩之乱凡國土天下一切不祥十六万八千惡神所作大政天能制止若干眷屬無制止如是災害非專當

時各非盡大王福非盡公卿運只此日本大政天忽怨所致也金峯八幡等諸大菩薩等我滿德天堅執不許故不能自由而已而惣天下愚人不知災難之源於鎮護善神還處損害之咎甚可憐哉此天神心為根本一切災難爭

16

17

發^{云々}以何方便拔濟之^{云々}今須調和彼大政天王怨心兼以之拔苦修法^{云々}仏子汝我此慇懃數當獻主上并撰政

大臣宜早為先帝生天及天下安隱造立天祠勸請

彼大政天謝咎祈福告從山北建立一小天祠擇求清淨

持律僧一口令便其祠謝咎祈福何者彼大政天常住

所分行南西二方諸国政故其天祠前庭樹令通橋左

右花樹截烈可号大威德天祠又大津北極一小天祠建

立大天於其所差行東北二方諸國之政故置清淨僧一口

謝咎祈請可号日本大天祠又此天神屢住愛頂護雷

峯常城中遊行嵯峨野諸神行故其正宮建立大盛德

城可相像其本城大海中寶嶋也故可建立水中大澤池

是相應地也其池正中為一小嶋築堅已了其地雜人不可令

踏但除建立間其宮殿建八面樓閣八方開戸一切莊嚴如

彼本城周帀作軒廊高不過閣八面開戸嶋形如壇山水

不高奇巖立列樹栽行其池塘上以為馬場多栽花樹

可為路嶋東西建立二幢其上安日月形家表形鑄造之

亦其池北山建立一小堂安置五大明王并護世一切天等像亦

東方作我滿德法主天像西方作彼日本太政天像各

々形如東西二王但東方乘龍西方乘鳳為異耳其小堂

左右建立一神殿天下諸神自來住止我二天所在之處一切

神明无不来應其城可号日本大政威德天寺一切災難二

天前祈願自然消滅我与此天行住坐臥同共一處為遮惡

護國也欲祈請者常以四月十五日十月十五日^{云々}設音樂公

卿相共行養三寶及二天又每年正月一日大王自幸可祈

年中祥福置淨行僧六口可修法花三昧又置阿闍梨一

口令修真言大法又以士兵令衛護之又改天慶三年為太

政元年改大臣号永為撰政大臣延喜通寶為太政大寶一天

下大政天之心也一切王法不違舊式又道俗成業有才沈淪

者諸司有勞各令有慶賀大赦天下如常以忠謹之心修如

是之善天下大平災難已銷又金峯淨刹閭浮檀金之根

至於輪際故雖壞劫金峯不可懷此權現牟尼我所奉之

尊也四時之中其三時一切道俗參會供養奉仕滿願唯

尊也四時之中其三時一切道俗參會供養奉仕滿願唯

嚴寒時无人承事年分度者一人置冬籠師子号香燃

供養天下鎮護假令彼主上及臣下不見用我慇懃之教

誨仏子汝為俗降三寶為救護衆生寧不讀誦經典專

一可營此天祠之事也仏子令貧道无力年堪此事小堂

建立未半況此大事乎天王曰汝无世間之福猶削出世

之富須率一切四衆為己身為天下誰不令應汝若不信我

此誨令我為大障當妨汝修道冬籠之事若不被用之

汝當籠可奉仕之汝若我言信行我當為汝作外護者我

捨化樂天勝樂住此卑少城是為利物護国也我深念彼

日本故慇懃傳此治国要方而已我子孫親昵人々何不哀

憐乎仏子奉天王命已了即至本寶殿窟以如上事一々

申金剛藏王大菩薩云我令汝知世間災難衆生苦惱之根源

廣作仏事利益衆生故令一切普聞知宣即申手摩頂曰

人身難得汝已得之仏身難見汝能見能護三業不得放

逸捨離地獄往生天堂宣教授既畢重教歸洛起入巖穴

即得蘊生也于時八月十三日寅時也入死門所經十三箇日

具迎來僧侶五箇人日記也^{云々}

└ 19

└ 18

右一卷大和國內山永久寺所藏于爰嘉永四年秋八月

不圖感得寫之雖末法以威神力呵護而存者乎

実 尊神御垂跡之因縁可畏可仰幸受此土

之生共預 大政天化益可生其淨土連列眷

属之一人者也

└ 20

└ 21

└ 22